

新約聖書の中の祈り 第8回

□ 「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□ 「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□ 「イエスの祈り」のアウトライン・・・福音書の中から、イエスの祈りについて22の事例を取り上げ、それぞれに祈りの場所や時間、そのときの姿勢、祈りの内容、そして祈りがどのように答えられ、どのような出来事につながっていったか、などを見ていきます。

1. 洗礼を受けたときの祈り
2. 第一のメシア的奇跡をはさんでの祈り
3. 十二使徒を選んだときの祈り
4. 五千人の給食を前にしての祈り
5. 五千人の給食の後の祈り
6. 四千人の給食のときの祈り
7. ペテロの信仰告白を前にしての祈り
8. イエスの変貌のときの祈り
9. 70人の弟子が帰ってきたときの祈り
10. 「主の祈り」に先立つ祈り
11. 子どもたちを祝福したときの祈り
12. ラザロのよみがえりのときの祈り
13. ギリシヤ人がイエスに面会を求めたときの祈り
14. 最後の過越の食事での祈り
15. 最後の過越の食事の間での ペテロのための祈りへの言及
16. 将来、聖霊が信者の内に住んでくださることについての祈り

17. 大祭司としての祈り

18. ゲツセマネにおける祈り

- 19. 差し控えられた祈りについての言及
- 20. 十字架からの祈り
- 21. エマオにおける祈り
- 22. 昇天を前にしての祈り

□ 「イエスの祈り」の22の事例から見る24のポイント

1. イエスは、しばしば、一人になって祈るようにしていた。
2. イエスが祈りをした時間帯は、さまざまである。朝であったり、夕であったりである。
3. イエスが祈りをしたときの姿勢も、さまざまである。立って、ひざまずいて、あるいは顔を地面につけて、天を見上げて、というように。
4. イエスの祈りは、しばしば、重要なターニングポイントとなる出来事の直前に祈られている。
5. イエスは、大いなるみわざをするときにも祈った。
6. イエスは、プレッシャーを受けたときにも祈った。
7. イエスは、悲しみのときにも祈った。
8. イエスは、死の直前にも祈った。
9. イエスは、とりなしの祈りをした。ペテロのため、イエスを十字架に釘付けにした兵士たちのため。
10. イエスの祈りの時間は、長短さまざまであった。夜通しや、1時間など。
11. イエスは、父なる神に対して祈った。誰に祈るのか、父なる神である。
12. 祈りのタイプはさまざまである。請願、祝福、感謝、とりなし。
13. イエスは、聖霊に満たされ、喜びにあふれて祈ったことがあった。
14. イエスは、「祈りの本」によらずに、その時その場、自分のことばで祈った。
15. イエスは自分の感情が大きく動く中で祈ったことがあった。
16. イエスは、個人的にも公けにも祈った。
17. イエスは、ほとんどの場合、信者のために祈った。不信者のための祈りは稀である。
18. イエスが祈る動機の中には、神の栄光を含んでいた。そして、私たち自身と他の人々の霊的に益となることを含んでいた。
19. イエスの祈りは、漠然としてはいなかった。誰のために何を祈り求めるのか、はっきりとしていた。
20. イエスは、祈りの中で何かを願い求めるときには、その理由を明確にした。
21. イエスの祈りは、誰かと対話しているような調子であった。
22. イエスは自分の祈りがすべて聞かれているという確信をもっていた。その一方で、祈りの中で求めたことが、すべてそのとおりに答えられたというわけではない（マタイ 26 : 36~46）
23. イエスは、祈りの中で何かを願い求めるときには、父なる神のみこころにかなうのであれば、という条件付きで求めた。
24. イエスは、祈りの中で何かを願い求めるときに、その願いを繰り返し言うことがあった。

□18番「ゲツセマネにおける祈り」

聖書箇所 マタイ 26：36～46

1. 危機に陥ったときの祈り

(1) マタイ 26：37～38

- ① 「イエスは、悲しみ、もだえ始められた」・・・このとき、イエスは何かを知って、悲しみもだえ始めた。「もだえる」とは、イエスを恐れさせることがあって、それによってショックを受け、続けて強いストレスを受ける状態であった。
- ② 「わたしは、悲しみのあまり、死ぬほどです」・・・イエスの悲しみ、恐れ、ショックはあまりに強くて、「死ぬほど」である。感情的にきついでなく、それが肉体の状態にまで及び、体のフレームを破壊してしまうほどであった。

(2) マルコ 14：33～34

- ① 「イエスは、深く恐れ、もだえ始められた」・・・「深く恐れ」は、「大変驚き」の意味も。イエスがそれまで知らなかったことが知らされ、それにイエスが大変驚いて、とても重いショックを受ける状態になった、ということ。
- ② 「わたしは、悲しみのあまり、死ぬほどです」

(3) ルカ 22：44

- ① 「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」・・・ゲツセマネにおける祈りは、明らかに、イエスにとって個人的な危機に陥っての祈りであった。

2. 弟子たちの役割

(1) マタイ：26：36～38、40～41

- ① 「わたしがあそこに行って祈っている間、ここにすわっていなさい」(36節)
- ② 「ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい」(38節)
- ③ 「わたしといっしょに目をさましていること」(40節)
- ④ 「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。」(41節)

(2) 弟子たちの役割は、眠らずに目をさましていること

- ① イエスは、真の危険が迫っていることを弟子たちに警告した。
- ② イエスは、弟子たちに、イエスのために祈るようには求めなかった。41節で祈るように言われたのは、イエスのためではなく、彼ら自身のために祈りなさいという警告である。「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい」(41節)

3. 3回にわたる祈りのリトリート

- (1) ここでイエスが祈るのは、危機に直面し、驚き、悲しみ、ショックを受け、そのあまり、体も壊れてしまうほどの状況から、自分をリトリートさせる、すなわち休息させ、元気を回復させるためであった。祈りは、危機のときの避難所である。

(2) 福音書は、ゲツセマネの祈りにおいて、イエスは、3回のリトリートを繰り返したと記録している（マタイ 26：42「二度目」、44「三度目」）。

4. 1回目のリトリート

(1) 祈りの場所など マタイ 26：39「イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。『わが父よ・・・』」

- ① イエスは、弟子たちとは少し離れた所に行かれた。リトリートでは、自分を人々から少し離れさせるという、距離感が必要。
- ② このときのイエスの姿勢は、「ひれ伏して」
- ③ イエスの祈りの先は、父なる神。イエスの場合は「わが父よ」であるが、私たち信者の場合は、「私たちの父よ」となることに注意（マタイ 6：9）

(2) 祈りの内容 マタイ 26：39「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのようになさってください」

- ① 祈りの内容は、願ひ求め。「この杯をわたしから過ぎ去らせてください」
- ② 祈りの基盤は、父なる神のみこころへの従順。「できますならば」「しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのようになさってください」
 - 「できますならば」というのは、できるか、できないか、神の力を問うものではなく、「神のみこころにかなうならば」という意味
 - 神はいかなることでもできる、という信頼は、祈りの前提。
- ③ 「この杯」とは、何か。杯が象徴するのは、**神の怒り**である。
 - イエスは、自分が死ぬために来たことは知っておられた。十字架にかかって死ぬことは、イエスにとって驚きでも恐れでもなかった。
 - イエスが驚いたのは、神の怒りを十字架上で経験しなければならないということを知ったからである。
 - その神の怒りとは、父なる神との**霊的分離**、**霊的な死を経験すること**である。イエスは、子なる神として父なる神とは一つであるお方である。人となられてこの地上にお生まれになってからも、天の父とはいつもいっしょにおられたお方である。父なる神と一瞬たりとも離れたことのないお方が、十字架上で霊的に分離される、そのことがイエスにとって驚きであり、恐れたことであった。
 - これは、十字架上の後半 3 時間で起きた。地上が暗黒で包まれた時間帯であった。詳しくは、本資料の P.6、【補足】を参照ください。
 - イエスは、その杯をできることなら、過ぎ去らせてくださいと願った。できることなら、霊的分離だけは経験したくなかった、それほど**霊的な分離**とは恐ろしいことである。私たちには、その自覚があるだろうか。私たちは生まれたときから霊的には神から分離された、罪びとであった。

霊的には死んだものであった。それが、十字架の贖いによって罪を赦され、霊的に生きるものとされた。その恵みの大きさを自覚したい。

- イエスの祈りは、ご自分の思いを願い求めると同時に、進んで父のみこころを受け入れますという祈りであった。

(3) マルコ 14 : 35～36

① 「イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し」

- 少し離れた所で祈った。祈りのリトリートでは、この距離感が必要。
- このときのイエスの姿勢は、「地面にひれ伏して」、しかも原語では、繰り返し地面に倒れてというニュアンス

② 「もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈り」

- 「祈り」とある原語は、繰り返し祈ったことを示す表現

③ 「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください」

- 祈りの先は、父なる神
- 父なる神はどんなことでもできるという信頼
- 自分の願い求めは、神の怒りの杯を取りのけてほしい。しかし、自分の願いではなく、父なる神のみこころを受け入れますという祈り。

(4) ルカ 22 : 41～42

① 「ご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。」

- 具体的に「石を投げて届くほどの所に離れて」と距離感を記録

② このときのイエスの姿勢は、「ひざまずいて」

③ 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」

- 祈りの先は、父なる神
- 願い求めは、「この杯を取りのけてください」
- しかし、祈りの基盤は、父なる神のみこころ

5. 2回目のリトリート

(1) マタイ 26 : 42

(2) マルコ 14 : 39

(3) ルカ 22 : 43 「すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた」

- ここでは、天から御使いが遣わされてきて、イエスを力づけた。

6. 3回目のリトリート

(1) マタイ 26 : 44

(2) ルカ 22 : 44 「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のし

ずくのように地に落ちた」 このときのイエスの状態は、肉体的にも大変な苦しみの中にあった。汗が、血の大きなしたたりのように流れ落ちて、地に降った。

7. この祈りに見られる特徴

(1) 何度も同じことを祈った。

① マタイ 6:7「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです」

- 形式的な祈りの定型文をそのまま読むようなことは、祈りではない。
- 「ことば数が多ければ聞かれると思う」のは誤りである。

② 心から出たことば、定型文をそのままではなく、信者が自分のことばで祈るならば、それを何度も同じことばで祈ったとしても、その祈りは父なる神に受け入れられる。

(2) 姿勢は、ルカの福音書によると「ひざまずいて」、マタイによると次に「地面にひれ伏して」、マルコでは「繰り返し地面に倒れ込んで」。ここから想像されるのは、最初はひざまずいて祈り、苦しみが増す中で、手を地面についてひれ伏し、さらに苦しみが増して、何度も地面に倒れ込んで祈った。このような姿勢は、それまでのイエスの祈りにおける、通常の姿勢ではなかった。しかし、ゲツセマネでは、そのような姿勢で祈った。

(3) 祈りの結果

① イエスの願い求め「この杯を取りのけてください」は、答えられなかった。

② しかし、イエスの祈りは答えられた。「どうぞ、みこころのとおりをなさってください」(マタイ 26:42)

③ イエスの勝利である。

- イエスは祈りによって恐れを乗り越え、自分の感情を完全にコントロールするに至った。
- イエスは、進んでこの杯を飲んだ。十字架上で霊的な死を体験した。
- そして十字架上で霊的な復活をしたうえで、肉体の死へ。そして三日目に、父なる神によって復活した(使徒 2:32)。

【補足】メシアの死と復活

1. 広い意味での、からだの復活(よみがえり)には、2つのタイプがある

(1) 蘇生=身体的ないのちを回復すること・・・身体的ないのちを回復しただけであり、その後、再び死ぬ。

(2) 狭い意味での復活=真の復活のいのちを受けること

① もはや死ぬことのない、復活のいのちを受ける(ロマ 6:9)

② 復活させられたからだの性質は、元のからだの性質とは変わっている。身体的には死ぬことのできない、からだである。

- ③ 現時点では、このような復活を経験したのは、イエスおひとりである。それゆえ、「復活の初穂」
- ④ ヘブ 2:14 イエスは死を通過した → 蘇生の場合は、死を通過していない。身体的ないのちから身体的な死に移り、そこから身体的ないのちに戻っただけである。イエスは単に死から戻ったのではなく、死を通り抜けた。身体的いのちから身体的な死へ行き、そこから戻ったのではなく、死を通り抜けて、その向こうへ進み、復活のいのちに到達した。
2. メシアが死んだその死の種類は2つ
- (1) 霊的な死
- ① 十字架上の後半の3時間、地上が暗黒に包まれた時間。その暗黒は、メシアが父なる神から分離されて霊的な死を経験していたことの象徴。
- ② このとき、世の罪はメシアなるイエスの上に置かれ、父なる神はメシアから顔をそむけた。父なる神と、人としてのイエスとの間に分離があった。この3時間、イエスは霊的に死んだ。
- ③ 後半3時間の最後に、イエスは叫んだ「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」イエスは、霊的に死んでいた（マタ 27:45~46、マコ 15:33~34、ルカ 23:44）。
- ④ ルカ 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」・・・「父よ」と呼びかけたこの時点では分離状態ではない。霊的死から復活したことを示す。
- (2) 肉体の死（マタ 27:50、マコ 15:37、ルカ 23:46、ヨハ 19:30）
- ① マタ 27:50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた（霊ギプニューマを解き放たれたギアフィエイミ）
- ② ルカ 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られたギエクプネオウ【息を吐きだす、霊を放つ】
- (3) 肉体の死は、罪の贖いのために必要であった。これに対して霊的な死は、贖いのためではなく、私たちに同情できる大祭司となるために必要であった（ヘブ 2:17~18）
- (4) イエスは、十字架上で、霊的な死と肉体の死との両方を経験してくださった。

お知らせ： 10月のオンライン集会

- 10月10日（土） 13:30 イエスのことば⑦ オンラインのみ
- 10月11日（日） 13:30 新約聖書の中の祈り⑨ 熊本集会同時開催
- 10月17日（土） 13:30 新約聖書の中の奥義④ ミニ・福岡集会も開催
- 10月25日（日） 13:30 新約聖書の中の祈り⑩ 熊本集会同時開催